

小笠原諸島返還50周年記念事業 「オガグワの森プロジェクト」植樹会

1. 絶滅危惧種オガサワラグワ

東京の南1,000Kmに位置する小笠原諸島は、一度も大陸と地続きになったことがない海洋島で、独自に進化した固有種が数多く生息していることで有名です。オガサワラグワも小笠原諸島の固有種で、かつては小笠原諸島の原生林(湿性高木林)を構成する主要な樹木でした。しかし、木目が緻密で美しいため、高級材として取引され、開拓初期にほとんどが伐りつくされました。残された個体も移入種のアカギやシマグワの影響で存続の危機に陥り、絶滅危惧種となってしまいました。そこで、林木育種センターでは、組織培養技術を利用し、クローンの生息域外保存を進めてきました(写真1)。今では、現存個体の約7割をクローン保存するに至っています。

2. オガグワの森プロジェクト

小笠原諸島は、戦後米国統治下に置かれ、昭和43年に日本に返還されました。平成30年は返還50周年にあたり、さまざまな記念事業が行われました。「オガグワの森プロジェクト」もその一つで、

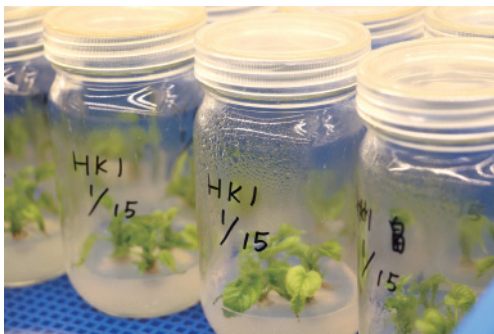


写真1 組織培養による生息域外保存



写真2 小笠原で馴化・育成された苗木



写真3 「オガグワの森」植樹会の参加者

父島の村有林を整備し、村民の手でオガサワラグワを植栽し、育成していくことで、小笠原の自然を身近に感じてもらうというものです。このプロジェクトのために、林木育種センターと小笠原村は覚書を締結し、生息域外保存しているオガサワラグワの苗木を里帰りさせることとしました。小笠原諸島は固有生物の宝庫であり、土付きの苗木を持込めないなど多くの制限があるため、組織培養苗から無菌発根苗木を作成し、それを小笠原に運び、約1年かけて馴化・育成しました(写真2)。

3. 植樹会

平成30年12月9日に、里帰りした苗木を植栽のために整備していた区画に植栽しました。植樹会には、島民と関係スタッフ合わせて100名近くが参加しました(写真3)。12月とはいえ亜熱帯の小笠原はとても暑く、滴り落ちる汗をぬぐいながら楽しく約70本を植栽しました(写真4)。これからしばらくの間は水やりなどの手入れが必要となりますが、今後、立派なオガグワの森になることが期待されます。

(遺産資源部 探索収集課 磯田 圭哉)



写真4 オガサワラグワの苗木の植栽